



“supersalone”とイタリア的これからの住まい方

今号のミラノ通信では、昨年の9月5日から10日まで6日間、ロー・フィエラミラノ国際見本市会場で開催されたミラノサローネ国際家具見本市（以下、ミラノサローネ）特別展「supersalone」と、そこから発信されたメッセージの流れを汲んで、これからのイタリア的な住まい方についてお伝えします。

supersalone - イノベーション・環境配慮・クリエイティビティ・文化交流・デジタル体験

今回のミラノサローネは、今年6月開催予定の第60回へ繋ぐハブ、特別展「supersalone」という位置付けで、これまでの見本市とまったく異なるフォーマットを採用して行われました。2020年度の開催が新型コロナウイルス感染拡大防止のためのイタリア政府の措置により中止となり、昨年度も4月が6月に、そして9月へと開催時期の延期が続く中で実現が危惧されたのですが、ワクチン接種が順調に進み始めた4月、ミラノサローネとイタリア家具工業連盟がローマのイタリア首相官邸を訪れ関係省庁との綿密な交渉を行いました。そこでは、ミラノサローネの開催が国全体にとって計り知れない財産であることや、この見本市への参加企業が、家具部門やイタリア経済、社会の回復に不可欠な推進力を与えることなどを、政府が十分に認識していることが確認されました。この交渉に追随するかのように、EU圏内で共有するグリーンパス（ワクチン接種、治癒あるいは陰性の証明書）が初夏にイタリアでも導入されたことで安全基準が明確となり、関係者たちが夏休みを返上して準備を進め、9月初旬の開催を達成させることができました。ロックダウン解除後に開催されたイタリア国内初の大規模な展覧会として、人々の記憶に残ることでしょう。

前回2019年の開催からこの時まで、家具・デザイン関連の各社は、あらゆる面でこれまで経験したことのない数々の困難な状況に直面しながらもそれらを克服し、新製品の発案・実現を推し進め、発表の場を待ち望んでいました。安全な開催はもちろんのこと、より多くの企業が参加できるように、と展示方法に斬新な工夫が盛り込まれたことを記者発表会で知った時には、会場構成のイメージがうまく想像ができませんでしたが、この展示方法は出展企業の経済的負担を軽くしながらも、各社が創造力で勝負する思いがけないイベントへ変換させる重要な役割を果たしたのです。デザインの街ミラノからのメッセージを再び全世界へ発信するために、期間中通して業



撮影 GIANLUCA DI IOIA

5月26日にミラノトリエンナーレの中庭で行なわれた記者発表会の様子。



撮影 ANDREA MARIANI

全出展者に共通する展示形式で構成された会場の様子。

界関係者だけでなく一般の来場も受け入れ、最終日に新製品を購入できるシステムも採用されました。このように開かれた見本市はこれまでにない企画ですが、さらに、遠方や国外からもリモートで参加できるようにデジタルプラットフォームを介して、会場の様子やカンファレンスなどのイベントが、連日リアルタイムで発信されたことも新しい試みでした。

この特別展のキュレーションは、ミラノのレジデンスビル「Il Bosco Verticale（縦型の森）」をプロジェクトしたことで有名な国際的に活躍する建築家でありミラノトリエンナーレ館長のStefano Boeriに一任され、今回のために結成された若いキュレーターチームと共に、イベントのコンセプトと展示構成を導き出しました。彼は「supersaloneは、パンデミックの長い夜を乗り越えた『スーパーイタリア』が元気を与える企画なのです」とその意気込みを語りました。

従来と異なる最初の点は、前述した展示フォーマットの基本条件です。従来であれば、ブースのデザインは各社が思い通りに立体的に作り上げますが、今回見本市に使われた4つのパビリオン内（展示総面積6万8520平米）では、企業の規模に関係なくすべての出展者が、モジュラー形式の長い平行なパーティションと各々の創造力を駆使しつつ、企業のアイデンティティや製品を垂直の壁に、あるいは水平の面に展示する、というシステムに挑みました。「大規模なデザインライブラリー」をイメージした展示方法ですが、長いパーティションの途中に商談用スペースや通路間を通り抜ける空間なども設けられ、モジュールから連想される平坦な構成とはかけ離れた、流動的でダイナミックな展示が生まれました。また、循環性と持続性を念頭に置き、パネルや什器などインスタレーションを構成する資材へリサイクル材を使用したり、パーツを極力少なくしたり接着剤を使用しない構造を考案し、材料と部品を使用後に解体して再利用できるように設計されたそうです。

地下鉄地上口から見本市会場メインゲートへ向かう空間では、環境への配慮を強調する100本の木で構成されたプロジェクト「Forestami」が来場者を迎え入れ、これらの樹木は見本市終了後、会場内に設置された高木100本と合わせてすべてミラノ市内に植樹される予定です。これらの木は、そこに佇む人たちの心を和ませるだけでなく、内蔵された特殊な変換器により、スピーカーのように音を共鳴させるサウンドインスタレーション「Resonantrees performing Marco Mengoni」の主人公としても起用されました。木に触れると、環境保護のアンバサダーとしても活躍する歌手Marco Mengoniの音楽が伝わってくるシステムです。開催日初日のオープニングセレモニーへは、Mattarellaイタリア共和国大統領が出席し、このイベントの開催を実現させた勇気とその質の高さを讃え、開催実現を国全体の喜びとして分かち合いました。



撮影 LAILA POZZO

supersaloneのキュレーターStefano Boeri。



撮影 DIEGO RAVIER

長い通路の途中に設けられたトンネルから顔を覗かせるArtemide社の展示。



撮影 DIEGO RAVIER

メインゲートの前に設置されたForestamiとサウンドインスタレーション。



撮影 FRANCESCO RUCCI

Mattarella大統領を迎えて行なわれたオープニングセレモニーの様子。

今回の出展数は425ブランド、その内16%はイタリア国外からの出展です。企業の展示に並び、以下の展示・イベントが併催されました。まず、22カ国に点在する国際デザインスクール48校から選ばれた170人の若者の作品が一堂に会する「The Lost Graduation Show (幻の卒業制作展)」、そして39人のクリエイターによる「The Makers Show」、ADI協賛によるCompasso d'oro賞受賞作品の椅子110脚の展示「Take Your Seat / Prendi posizione / 椅子の孤独と快樂」、MDFF (ミラノデザイン映画フェスティバル) が選んだ5つの映画作品の上映、イタリアのデザイン界では大切な一部門であるフード界から選ばれた9人の偉大なシェフが競演するフードコート、最後に、今最も影響力のある20人のクリエイターによるカンファレンスです。開催期間中の来場者数は計6万人を超え、その内の30%は113カ国からの外国人、そしてジャーナリストも世界各国から約1,800名が参加しました。

イタリア共和国大統領を迎えてのオープニングセレモニーを含む初日の模様は、下記のリンクよりご覧ください。

<https://youtu.be/Tk3kspi6zVA>

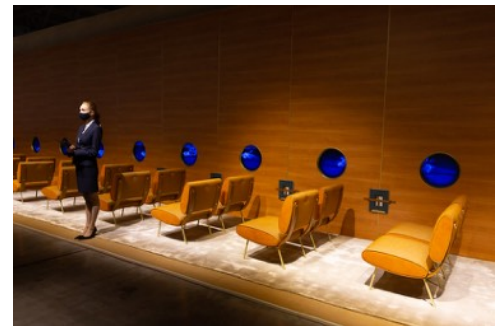
創造力を競い合う各社の多彩な展示

今回限りの特殊な条件に果敢に取り組んだ数々の展示の中でも、特に話題になったのはイノベーション、創造力、デジタルを絶妙に織り交ぜて企業のアイデンティティを発信した家具メーカーMolteni&C社の展示でした。一社で使用できる最大の面積を使い、架空の機内を演出するというコンセプトとデザインは、イスラエル人デザイナーRon Giladによるアイデア。Gio Pontiが1954年に航空会社Alitaliaのために制作した一人掛けソファ「Round D.154.5」がMolteni社とGio Pontiアーカイブにより共同でリメイクされ、展示空間一杯に配列される様は圧巻でした。それぞれのソファの脇に設けられた丸い窓へ刻々と変化していく上空からの景色が映し出され、まるで機上にいるような感覚を与える演出も素晴らしいものでした。

有名建築家たちと手を組んで数多くの傑作を輩出してきたNATUZZI社は、レリーフあるいはグラフィックにより代表作品の背景へ地中海の物語を描き出し、作品のそばにデザイナーの等身大ポップアップを添えて来場者をはっとさせる手法を用いていました。

歴史的なデザイン家具を扱うKnoll社の展示は、空間を大きく2つに区切り、一方では色とりどりのメンフィス的な幾何学立体へ作品を挿入し、もう一方では壁面いっぱいのスクリーンへデザイナーのインタビュービデオを映写するという、二つのボリュームのコントラストを生かした展示方法が印象的でした。

イタリアで一般的に使われている暖房システムのラジエーターを開発・製造するTUBES RADIATORI社は、形状やカラーリングにこだわったデザイン性の高い製品を提案してい

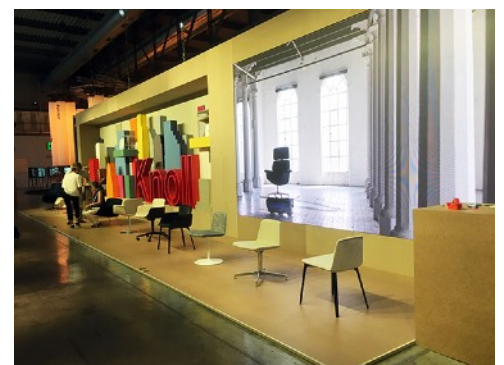


撮影 DIEGO RAVIER

Gio PontiのRound D.154.5で飛行機の機内を表現したMolteni&C社の展示。



地中海をイメージしたNATUZZI社の展示。



2つのボリュームがコントラストを生むKnoll社の展示。

ますが、壁面にパステル調のグラフィックを施しミニマルな展示で製品を引き立てていました。

昨年7月にミラノサローネの新代表に任命されたMaria Porroの親族が代々受け継いできた、イタリアの老舗家具ブランドPorro社の展示は、柔らかな照明の中に華奢なフレームのラック、そこにガラスの小物と透明感のある洋服が展示されるという、とても詩的な空間を演出。

最後に、日本から海外への渡航が困難な中であっても唯一出展を成し遂げ大きな注目を浴びたのが、ポータブル照明ブランドの株式会社アンビエンテックです。独自の卓越した技術によって蘇った倉俣史朗のオブジェ「SAMBA-M」、金属の削り出しと無垢なクリスタルガラスの上質な素材の組み合わせで丁寧に美しくデザインされた田村奈穂のライト「TURN+」、炎の揺らぎを表現する吉添裕人デザインの「hymn (ヒム)」など、最新技術を駆使したデザイン性の高い作品が来場者を魅了していました。



壁面グラフィックと製品が融合するTUBES社の展示。



ポエティックな空間でシステムラックを際立たせるporro社の展示。



日本から唯一出展を成し遂げた、アンビエンテック社の展示。

アンビエンテック社の展示の様子はこちらのビデオからご覧ください。

<https://vimeo.com/620597203>

こちらのビデオから、2日目から6日目までの会場の模様をご覧ください。

<http://youtu.be/e2gbhDxLVaU>

<http://youtu.be/qJkNWbg1QYk>

<http://youtu.be/3nBfcMtZa7M>

<http://youtu.be/1ro3RyvIKsU>

<https://youtu.be/rZpUklghlro>

The Lost Graduation Show

Anniina Koivuのキュレーションによる「The Lost Graduation Show (幻の卒業制作展)」は、コロナ感染の影響による厳しい状況下で、プロジェクトを発表できなかった2020/21年のデザインスクール卒業生の為に企画されました。目的は、ホームリビングの新しい解釈を探求し、現代のデザインが直面している最も緊急性の高い問題に対する解決策を、新世代のデザイナーたちのプロジェクトと共に提案していくことです。モビリティデザイン、インクルーシブデザイン、メディカルデザイン、スポーツデザイン、素材の研究、持続可能なデザインなど、デザインの領域は多岐にわたります。ゆったりと構成された展示空間へ、大きな作品は車から小さなものは薬の錠剤まで、コンセプトを明確に表現する作品が多様に展開。そして数多くの素晴らしい出展作品の中から、5つの作品がベスト・オブ・クラス2020/21年賞に選ばれました。この賞は、若い才能を開花させるための一つのきっかけとして与えられ、次回のサテリテへ受賞作品を出展することができます。デザインの完成度はもとより、サステナビリティ、技術、コミュニケーションが作品の中にどのように組み込まれているかが審査の基準となりました。以下、受賞作品です。ECAL (ローザンヌ美術大学) のFABIEN ROYが制作した新生児のための保育器「ROBUST NEST」は、先進国の先端機器へ軽量性、電力の持続性、強韌性を取り入れることで、発展途上国など不

利な状況下でも大切な命を救うことを可能にさせる医療機器です。シュトゥットガルト・アカデミーのSIMON GEHRINGが制作したテーブル「REGROWTH」は、自然素材、環境保護、アルゴリズムを調和よく組み合わせながら新しい職人的手法を示した作品です。パリのENSCI（国立高等工業デザイン学校）のPIERRE MUROTが制作したレンガ「FIL ROUGE」は、粘土の型の制作プロセスに焦点を当てて粘土質素材の新しい質感と美しさを作り出しました。テラコッタなど他の素材への応用が期待されます。メキシコのTECNOLOGICO DI MONTEREY校のITHZEL CERÓNとDANIEL LOPEZが制作した注射器「HELIX」は、本体と針が単一素材で構成されており、コンパクトで折りたためる構造に加え廃棄問題へ解決策を与えています。カタールのVCU（ヴァージニア連邦大学）のAMNA YANDARBINが制作した「YOLKKH - 私の国の人々のストーリー」は、戦争、家族の喪失、トラウマ、移住、帰属の難しさ、女性の自由、独立、希望といったテーマと向き合い、彼女自身と家族のストーリーを11枚のスカーフへ描き出しています。展示してある作品を前に、非常にインパクトのある作品だと感じました。佳作を受賞した作品は2点。1点は、ECAL（ローザンヌ美術大学）のMATHILDE LAFAILLEが制作した薬用錠剤システム「IMPRIME」。新技術3Dプリンターの可能性を活用し、視覚的にも形状的にもパーソナライズできる薬用錠剤の作成を試みるプロジェクト。もう1点は、IEDバルセロナ校のFRANCESCO MARIA LUCINIが制作した牡蠣の殻を再利用した素材「REDDO」。スペイン最大の養殖場に由来する有機廃棄物である牡蠣の殻を活用し、サンゴ礁を復活させるための新たな手法に焦点を当てています。



DEZEEN.COM
新生児のための保育器「ROBUST NEST」
紹介ビデオ
<https://vimeo.com/458961204>

SALONEMILANO.IT
新しい制作プロセスで作られたレンガ「FIL ROUGE」
紹介ビデオ
<https://youtu.be/gtFDeoxuWA4>

GERMANDESIGNGRADUATES.COM
自然素材、環境保護、アルゴリズムを調和よく組み合わせた「REGROWTH」
紹介ビデオ
https://youtu.be/CL-qj_Yg5Xk

SALONEMILANO.IT
単一素材で作られたコンパクトな注射器「HELIX」
紹介ビデオ
<https://youtu.be/qxQpA0Ssh6M>

SALONEMILANO.IT
スカーフ「YOLKKH - 私の国の人々のストーリー」
卒制を紹介するサイト
www.artsthread.com/portfolios/yolkkh-the-story-of-my-people/

Take Your Seat / Prendi posizione

4つの異なるテーマで、4つのパビリオンに配置された「Take Your Seat / Prendi posizione / 椅子の孤独と快楽」展。ADI /Compasso d'oro賞とのパートナーシップにより実現したこの展示では、1954年から現在までCompasso d'oro賞を受賞した30脚の椅子と名誉賞を受賞した100脚を超える椅子が、それぞれの時代の政治、社会、文化を反映するオブジェとして展示され、その変遷を考察する機会を与えてくれました。今でこそ誰もが座ることのできる「椅子」ですが、紀元前に



Take Your Seat / Prendi posizione 展の様子。

エジプト王のために作られた椅子が発祥と言われています。デザイナーが一度は椅子のデザインを手がける理由も、このような他のオブジェにはない象徴性に惹かれるからかもしれません。4つのテーマは、社会的地位を象徴する椅子「Take your seat」、オフィス環境に関連した「Work Learn Produce」、食卓を囲んだ親密な空間のための椅子「Cook Set Share」、公共空間のためにデザインされた椅子「Going Out: Going Public」です。そしてミラノ市内のADI Design Museumでは5つ目のテーマとして、受賞から外れたもののデザインそのものが時代を象徴する個性豊かな椅子の展示が行なわれました。

Identità Golose Milanoのフードコートとトークショー

今回の特別企画として各パビリオンへ、スターシェフや職人のオリジナルレシピを来場者が気軽に楽しみながら味わえる、フードコートが設けられました。イタリアを代表する料理文化の推進団体「Identità Golose Milano」がオーガナイズし、supersaloneのために考案された新しいオーダーメイドをコンセプトに、ミシュランの星を獲得しているシェフなど9人がそれぞれの代表的な料理やスイーツを一般の来場者に購入してもらおう、というアイデアです。



Identità Golose Milanoのフードコートでオリジナルレシピを披露したシェフたち。

また、もう一つの特別企画として、連日数々のトークショーが開催されました。キュレーターとして活躍するMaria Cristina Dideroが考案したプログラムは、デザイン、アート、建築、教育、循環型経済、環境問題、プロジェクトとキュレーションの関係など多岐にわたるテーマで構成され、デザイナー、建築家、アーティスト、学者、経営者がディスカッション、講演、レクチャーを行いました。同じ会場では、トークショーの合間に、ミラノ・デザイン・フィルム・フェスティバルとのコラボレーションにより、デザイン、建築、そして現在の社会や持続可能性への影響についての、研究、伝記、ドキュメンタリーなどの映画が上映されました。

イタリア的これからの住まい方

- 郊外、バイオフィリックデザイン、サステナ、コンフォート、テクノロジー

ロックダウン解除後にイタリア国内で行なわれた住まいに関する世論調査で、パンデミック以前と比較して以下の条件を満たす暮らしへの要望が高まっていることが浮き彫りになりました。オープンエアと緑のある空間、環境に優しくサステナビリティを考慮した設計、ローカルなエネルギー源、家庭菜園、自宅ジム、快適でインタラクティブな室内システムなどです。

supersaloneの展示でもこれらの要望へ応える製品が数多く見られますが、都市設計に携わる建築家Mario Cucinellaは、これからの住まい方についてさらにこう分析します。これからは、人々は人口密度の低い郊外へ住まいを求め、エコロジーな生活と共に自然への回帰を切望し、地域に密着した生活を楽しむ方向へ移行していくでしょう。以前は、仕事場との距離を第一に考え、人々は企業の集中する都市に住まざるをえなかったのですが、ロックダウンの間に経験し、その後定着したリモートワークによって、オフィスとの距離問題から解放されました。多くの方が、今後はゆったりとした空間の中で日常的に自然と触れ合える郊外で過ごしたいと望んでいます。プライベートと仕事場が密接し、まるで中世に機能していた「自宅兼工房」を彷彿させるスタイルですが、現代はそれに加えて、人々の健康と環境保護のために、エネルギーの消費を抑える効率的でエコロジーな技術、そして快適さが重視されていきます。そして、限られた住居空間が流動的に対応できることも大切な要素となります。

彼は、これらの要素と特にバイオフィリック（自然との共生）に重点を置く地域開発やビル設計などを、イタリア国内外で多く手がけていますが、生活のクオリティを向上させる「ケアするデザイン」のひとつとして、Artemide社のために斬新な照明器具Flexiaもデザインしています。この照明器具には、特別な波長で空間を衛生化するシステムと、新しく開発された目に優しい光を拡散する技術が搭載されています。



建築家Mario Cucinellaと照明器具Flexia。

Flexiaの詳細はこちらからご覧ください。

www.artemide.com/it/subfamily/4746404/flexia

数々の最新技術を駆使して室内に自然を再現する、Moroso社のDesign by Natureプロジェクトは、バイオフィリックデザインを究極までに突き詰めたアイデアです。コラボレーションを行なうスエーデンのデザインスタジオFront Designは、2005年より専門家たちと動植物に関するリサーチに取り組む中で、自然が記憶力や創造力だけでなく、人間の身体へ好影響をもたらすことを発見しました。森の中で生息する植物や岩などの自然から採取したリアルな画像を室内に取り入れることで、本物の自然と同じように良い効果を与えるのではないかと、という発想から、立体的にスキャンした自然の画像を家具のサーフェイスに使うアイデアが誕生しました。



Moroso社のDesign by Nature。

繊維として再現された自然の表情はこちらからご覧ください。

www.frontdesign.se/design-nature-project

今年のミラノサローネはいよいよ60周年を迎え、6月7日から12日まで開催されます。未来の人々の生活を、これまで以上に豊かに描き出してくれることを楽しみにしています。

執筆者 略歴

池田美雪 インテリアデザイナー 武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒
Istituto Europeo di Design 建築インテリア科卒

1994年よりミラノ在住 個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わったのち
2005年より クリエイティブ・コンサルティング会社(デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン)の共同経営者として活動

デザイン・アートに関するプロジェクトコーディネイト、翻訳および通訳
mikedata.it